



第十二回  
場所の顕在化による都市再編(まちの魅力再発見)

|       |   |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2010-08-09<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 増田, 昇<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://doi.org/10.24729/00005326">https://doi.org/10.24729/00005326</a>                 |

## 場所の顕在化による都市再編（まちの魅力再発見）

大阪府立大学大学院農学生命科学研究科教授 増田昇

## はじめに

日本の今世紀後半を少し振り返って見ると、一九六〇年代以降、高度経済成長が本格化する中で、都市への人口集中が進む。都市内部の過密化や都市の外延的拡大が進行し、この急激な都市化が引き起こす様々な問題に対応した施策が展開された。一方、この時期には、公害問題に端を発して生活環境問題が萌芽するとともに公害が住民活動の契機にもなる。70年代には、生活環境の改善のための都市基盤整備や都市内部の機能分化、都市郊外部での大規模ニュータウン開発とともに都市の交通基盤の整備が進んだ。80年代に入ると、アメニティや景観という概念に代表されるように環境を総合的に捉えたアプローチの重要性が再認識されはじめるが、80年代まではいわば成長期の都市づくりともいえる時代であった。しかし、バブル経済期をほぼ終えた90年頃から、成長期の都市づくりが終わりに近づき、都市の再生に代表

場所の顕在化による都市再編（まちの魅力再発見）

されるような成熟期の都市づくりへの転換が求められている。

成熟型都市づくりの一つは、都市が都市の繁栄を一方的に追求する時代から都市が自然との共生を図りつつ次世代に受け継ぐ持続可能な繁栄を目指すといったサステイナビリティやエコロジーの概念で表現される側面である。もう一つは、都市はより一層生活の場としての性格が強められ、コミュニティの重要性や都市の快適性・魅力が重視されるようになることである。さらに、地方の時代への動きが加わり、にぎわいや界隈性など各々の都市が保有する個性を生かした魅力づくりがより重要性を増すことである。

以上のような成熟型社会への転換の動きの中で、「場所の顕在化による都市再編（まちの魅力再発見）」について述べる。

## 1. 堺の全体像

### 1) 基本的視点

都市を捉えるときの基本的視点は、土地の地歴（自然・歴史・文化）に立脚した個性化である。

堺が立地している環境のベースは、市南部の起伏山地、泉北丘陵地、内陸の平野部、海岸の三角州といった層状の地形からできており、その中を石津川水系や西除川水系が流下し、山から平野を経て海までをつないでいる。

堺の歴史はこの地形に基づいて発達してきたといえ、泉北丘陵には須恵器の工房という弥生時代の最先端技術が立地し、次の古墳時代には内陸の平野部に仁徳陵やにさんざい古墳が築造され壮大な土木工事をしている。中世に入ると、海岸部に港を築造し自治都市を形成している。このように、常に地形に立脚しながら最先端の技術を展開してきたのが堺である。また臨海部の工業地帯の形成も評価の善し悪しに係わらず日本の戦後の近代化をリードした重要な部分であった。

### 2) まちづくり資源の保全と発掘

土地の持っている自然の条件やそのうえで展開されてきた人間活動という歴史を振り返ることによって、まちの魅力や今後の歩むべき道が見つかるとはならないか。

一例を述べると、南部丘陵やその下部に広がる田園エリア、あるいは石津川の河岸段丘上の緑や古墳の緑、社寺林など昔の自然の手掛かりになる緑が今なお数多く残されている。歩んできた歴史や自然を手掛かりにしながら、これらをどう再生しネットワーク化していくのが、堺の全体像を考える上で非常に重要である。

### 3) 動脈型都市構造に代わる静脈型都市構造の明確化

上記のような歴史や自然を基調としたネットワークは、人間に例えると静脈と考えることができないだろうか。

これまでの都市というのは、「人」と「もの」の移動を支える交通、いわば供給路を中心に発展してきたといえ、動脈型都市構造を持つ「線構造の都市」であった。それに対して都市は、元来、水や大気、生物、歴史からなる環境構造を持っており、その中で人間は面的な広がりを持って生活してきた。このような都市を静脈型都市構造を持つ都市といえないだろうか。

都市の後背地である自然地域と一体となった都市圏の中で、一体の都市圏をネットワークしているのが水系である。この水系に立脚した構造を静脈型の都市構造と捉える。

堺では石津川水系や西除川水系を基調とした静脈型都市構造の中に、一級の地域資源が眠っており、その発掘が堺の魅力となり、都市の自律性へと向かわせるのではないかと考えられる。

## 2. 堺の顔づくり―環濠都市・堺のイメージの復権による個性化

最初に環濠が築造されたのは今から約六〇〇年前、一三九九年大内義弘のときであり、環濠都市のはじまりである。その後、一五八六年には豊臣秀吉によって一部埋められるものの、自治都市化にともない再度環濠が復活するが、一六一五年の大阪夏の陣で完全に焦土と化した後、改めて土居川が掘削される。一七〇四年には上町台地を北側に迂回していた大和川が現在の位置に付け替えられる。この付け替えによって、土砂が堆積し堺の港の機能が著しく低下しはじめ、堺の衰退がはじまる。大和川が付け替えられてわずか百年後の一八〇〇年には沖合に現在の旧港を造り、環濠内の排水のために堅川と旧港につながる内川の二河川が築造され、堺の復権が試みられる。その後安定期を経た後、一八六八年の明治政府の成立を契機に都市の近代化が徐々に進む中、環濠の機能は低下していく。そのような中で、第2次世界大戦によって再び堺は焦土と化し、戦災復興土地区画整理によって環濠内の大部分は近世から継承されてきた都市基盤が大きく改変され、近代化が急速に進む。環濠の舟運は道路交通に取って代わられごみ捨て場と化し、一九六四年には阪神高速道路の建設のために環濠東側の土居川が埋め立てられる。その後、一九八〇年代には生活環境の質の向

場所の顕在化による都市再編（まちの魅力再発見）

上の必要性が気づかれはじめ、一九九〇年には「ふるさとの川」整備事業に指定される。再整備によって現在の土居川、内川は視覚的には改善されるが都市活動とは連携していないため、魅力ある空間とはなっていない現状にある。

## 3. まちの魅力再発見―「さかい・まち・こんなまち研究会」の取り組み

環濠都市堺の歴史を振り返る中で、堺市都市政策研究所の企画事業の一つとして、大阪府立大学と大阪女子大学の学生とともに環濠を取り囲む内川、土居川、旧港、環濠内部の魅力を再発見し、再生の手がかりを探った。

### 1) 歴史のコラージュ・旧環濠（内川・土居川）の再生

最初に考えたのは、歴史のコラージュ・旧環濠（内川・土居川）の再生である。

環濠は、ある種の結界である。都市の個性化を生み出していくための一つの区切りでもある。一方、周りの都市と旧環濠内の都市をつなぐという側面も持っている。こういった意味で、コラージュという言葉を使っていいのである。

具体的には、環濠へ入る橋を活用して環濠内部のイメージジャビリティをどう向上させるのか。それによって堺の都心部の個性化を図って

いこうとする提案であり、内川・土居川に新たな都市活動を導入する提案でもある。

## 2) 旧港・環濠都市再生の心臓部

旧港の形態そのものは非常に美しい形態を持っており、風景的に見ると連続的で非常に親密な空間である。

このような旧港に文化的な視点をどう導入すれば港が再生するのを探っている。都市は劇場であるという言葉もあるように、旧港という親密な空間に創造的活動を付与し、都市の舞台装置として旧港を再生させようとする提案である。さらに、海上と陸上交通との結節点としてのにぎわいの再生に対する提案も行っている。地場産業の自転車を使った陸上交通と水上バスの結節点による東洋のベニスの復活に対する提案でもある。

## 3) 環濠内部の埋もれた資源と市民生活との連携

環濠内部のたくさんさんの資源がなぜ埋もれているのか。これは、市民生活との関連が希薄化することによってもたらされた結果ではないだろうか。市民生活との関係が希薄化していくと、空間は空虚化していく。

空虚化した空間に明確なイメージを与え、そのイメージが発信されることによって場所が再び顕在化するのではないかといった提案である。個々の場所が顕在化することによって環濠内部の都市を再び個性

化でき、再生への歩みを始めるのではないかといった提案である。

具体的には、大小路通りのトランジットモール化と沿線市街地の活性化、大道筋の歩道空間の再編と路面電車の風景化、アスティ山之口の商活動の開口神社境内へのにじみ出しと神社行事の商店街へのにじみ出し、菅原神社と周辺市街地との一体化と神社固有の雰囲気再生、内川とザビエル公園との一体化やものづくり施設（工場や舟大工）との一体化、綾之町商店街のわが家の駅、南宗寺の内川へのにじみ出しと周辺の町屋との連続性、西本願寺別院の参道の再生、千利休屋敷跡と市立病院跡地での歴史的積み重ねの顕在化された空間化などである。

## おわりに——ランドスケープの視点からのもちづくり——

基本的視点でも述べたように、ランドスケープ（風景）とは、その土地が立地する気候風土の中で人間が永らく活動し、その活動が時間的に積み重ねられることによって形成された地域総体の姿であるといえる。ランドスケープの視点からのまちづくりは、まず、地域のランドスケープが成立してきた背景を詳細に読み取り、読み取ったものを十分に理解することから始まる。さらに、こういった理解を地域でいかに共有するかが重要となり、共有した理解のもとで新しい創造的な発想を加えることによって、地域固有の魅力ある都市再編が展開していくものと考えられる。

## 【第二回】堺の鉄砲鍛冶

堺鉄砲研究会代表 澤田 平

天文十二（一五四三）年種子島に伝来した鉄砲は、当時の戦国武将にとって、戦術を変える威力ある武器として競って求められ、堺や近江には鉄砲鍛冶が急増、活況を示しました。

鉄砲の伝来は、武器としての威力は勿論、はじめての工業製品として我国に強いインパクトを与え、鉄砲製造のための鑄鍛造技術といった冶金学・火薬の調合や生成のための化学・正確な射撃のための測量学・銃創にたいする外科医学の導入など、ヨーロッパの新しい学問を知る機会となりました。

また、鉄砲技術は日本の学者、職人達によって、和時計・医療器・万年筆・ライター・自転車など平和利用として技術転用され、画期的な産業を生み出しました。

その技術転用の過程を、実物資料の散策や発見、古文書の発掘、またそれについての実験、分析、実測などを積み重ねて作られた資料を展示して、科学技術史上からの鉄砲伝来の意義を考察しようとするものです。

〈内容〉鉄砲の国産化へのさまざまな取り組み

国産鉄砲のいろいろ

ネジの製作技術の応用とその他の先端的科学技術

- ・堺自転車博物館の火縄銃の特別展示
- ・江戸時代の万年筆「自潤筆」
- ・江戸時代の地震予知機
- ・江戸時代の測量計
- ・佐久間象山の電気治療機
- ・和時計の復元
- ・大阪城攻めの大砲が鑄造でなく鍛造であったことの証明

## 【第五回】内川・土居川水系等を生かした環濠都市の再生

内川・土居川まつり実行委員長 平野憲司

「土居川・内川をきれいにし再生する研究会」の活動記録を通して環濠の再生と住みよい街づくりを提案する。

一九八七年七月に土居川・内川の水質、資源、景観および歴史的由来について調査研究するために会が発足、親水性のあるまちづくりについて全国各地の事例を調査し、土居川・内川の水質を浄化する方法を模索しはじめる。

研究会の活動と堺市の取り組みとは、はじめ一致しなかった。

研究会は、水質浄化実験、シンポジウム、キャンペーン、土居川まつり、市民ウォッチング、連続市民講座、条例案の提唱、「水澄む町を」『よみがえれ！フェニックス土居川』の出版などの活動を行い、また、堺市は「内川水辺空間整備計画」を策定し、下水道整備による家庭排水の除去、ヘドロの浚渫によって海水を水源とした浄化を考えた。

一九九九年に両者の思惑が一致し、「堺市河川等水環境改善基本計画（内川水系）」が策定された。これによって仁徳陵く土居川・内川く堺旧港に至る水質改善が期待できる。

しかしながら、川にごみを捨てない、家庭排水は下水に流す、あるいは家庭排水の処分に留意する、土居川・内川を愛護する取り組みを続ける、など市民の取り組みもこれから継続して行われる必要がある。